

図書館だより

発行 多可町図書館

〒679-1133

多可郡多可町中区靴屋 434-11

TEL 0795(32)5170

FAX 0795(32)5171

<https://www.town.taka.lg.jp/library/>

昨日と同じ今日、今日と同じ明日がずっと続く日々。なんの感謝・感動もない日は、あつという間に過ぎいつしか一年が終わっています。そんな時、多可町のニュースキヤスターになれるふるさと納税を知り感動し、応募しました。しかし、コレだけでは物足りないと感じていました。実は私は4冊の本を出版しています。「それを全国に広めるのが自分の夢」とまで言い、最も応援してくれていた教え子が51歳という若さで亡くなりました。彼の夢の実現のためにも本の朗読もさせていただきたいと、たかテレビの局長さんをお願いし「朗読の部屋」が誕生。本の内容は全て実話で、東京都のある区内で一番荒れていた学校の支援に行き、道徳の教材として話しました。「もつともつと話を聞きたい。本にまとめたい」という子ども達のリクエストに、応えたものです。ぜひ、お読みいただき、ご親戚やご友人にお薦めいただけますと、多可町とご縁ができた甲斐があります。

教育アドバイザー

松村二美

話が変わりますが、51歳で亡くなった教え子は、彼が高校生の時に父親の会社が倒産。働きながらアメリカの大学を卒業しました。そして、ニューヨークやシンガポ

ル、日本にうち社を持つ社長になったのです。彼には生きる力がありました。また、孫自慢になり恐縮ですが、孫は小4で英検2級に合格し、慶應中学にも入学できました。先日は、裁判を傍聴しに行ってきたらしいです。この二人に共通するのは、幼い頃から読書好きだったということです。そして、両親共に読書家であったことです。多くの可能性があるステキな町、多可町のお子様方が、素晴らしい人生を歩まれる初めの一歩は「読書」からと考えています。それは、ご両親が本を読んでいる姿を見せる事が基本です。お忙しい日々だとは思いますが、頑張っていたいただきたいです。



言の葉だより

子どもたちに近い目線を持ち続けた作家

宗田 理 編

1985年に出版された『ぼくらの七日間戦争』。中学生たちを主人公にした、宗田理著『ぼくら』シリーズは全51作品、累計部数2000万部を超えます。

1928年、東京都世田谷区生まれ。8歳の時に開業医だった父親が死去し、その後は母方の祖父が住む愛知県で育ちました。商業学校に入学した年、太平洋戦争が始まり、「死ぬしかない」と諦めたこともあったそうですが、17歳の時終戦を迎えます。

戦後名古屋で見たアメリカ映画に感動し、映像の勉強をするため、日大芸術学部へ入学。卒業後はシナリオライターの助手や雑誌の編集者などを経験します。作家の原稿を手伝いながら書いてみた作品が、直木賞の候補になったこともありました。

『七日間戦争』が生まれたのは、当時新聞で連載していた小説を、角川の担当編集者の娘が読み、父親に「こういうのを書いてもらったら」と勧めたことがきっかけなのとか。以来子ども向けの本を1学期に1冊のペースで書き続けたといいます。そして昨年、『ぼくら』シリーズ51作目『ぼくらの東京革命』を出版し、今年4月、95年の生涯を終えられました。

自身の体験から、反戦を訴えてきた宗田さん。「いつの時代も、悪い大人が権力を握れば、正直者や弱い者は利用される」。しかし作品に登場する「悪い大人」たちはどこか間抜けで、憎めない一面を持っています。そんな大人たちに対し、暴力ではなく「いたずら」で面白おかしくやっつける、というのが、宗田さんのこだわりでした。あるインタビューで語った言葉があります。「大人は経験も知識も豊富だが、ただすべてを信用するのではなく、自分自身の頭で考え行動する。そういう子どもたちであってほしい」と。

◆◆◆ 多可町図書館カレンダー ◆◆◆

— 7月 —						
日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

— 8月 —						
日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

— 9月 —						
日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

休館日

【こたえ】Ⅰ…③ Ⅱ…② Ⅲ…④ Ⅳ…④

人間、どんなに苦しくても、生きてさえいればなんとかなるものなんだ。特に若いうちの失敗や苦勞は、それをがんばって乗り越えることができれば、その人をいちだんと大きく成長させてくれるものなんだよ。

— 『ぼくが見た太平洋戦争』より —

宗田理さんに関連するクイズです。

I. 大学を卒業後、1年半ほど週刊誌の編集に携わります。週刊誌の名前は？

- ①『週刊アスキー』
- ②『週刊現代』
- ③『週刊スリラー』
- ④『週刊文春』

II. 1979年、自分の名前で書いた最初の小説が直木賞候補になります。その小説のタイトルは？

- ①『ペテン師ファミリー』 ②『未知海域』
- ③『誘拐ツアー』 ④『欲望の靴』

III. 『ぼくらの七日間戦争』の拠点になった場所の名は？

- ①自由城 ②奔放国 ③開放域 ④解放区

IV. 1988年公開した映画『ぼくらの七日間戦争』。これがデビュー作だった俳優は誰？

- ①後藤久美子 ②深津絵里
- ③森高千里 ④宮沢りえ

【こたえ】は左下にあるよ

【参考文献】

『江古田文学』(江古田文学会)

『ぼくが見た太平洋戦争』(PHP研究所)

『ぼくらの七日間戦争』(角川書店)

子どもの読書週間 特別おはなし会

5/11

4月23日から5月12日のこどもの読書週間に合わせ、おはなしサークルあいあいさんによる特別おはなし会を開催しました。こどもたちは語られるおはなしや楽しい絵本に引き込まれ、少しこわい紙芝居にも「こわーい」といいながら見入っていました。みんな終始リラックスした様子で、楽しい時間になりました。



図書館 NEWS

— 4～6月 —

トライやる

6/5～9



中町中から1名、加美中から1名、計2名の生徒が図書館業務を体験しました。本の貸出・返却以外にも、本にフィルムシートを貼る装幀作業、新聞整理、分室等への本の回送、ポスターづくりなど、日頃目にすることの少ない図書館業務も体験しました。期間中には図書館まつりもあったことから、大量の本を移動させるなど、大忙しの5日間でした。



今回図書館に来てくれた2名は職員から指示された以外にも自発的に館内に飾るアジサイや職員のエプロンにつけるカエルを折り紙で作成するなど、自分たちが図書館に出来ることを自ら考え行動に移していました。

トライやるを通じて得たことを、今後の学校生活に活かしてもらえたらと思います。

※図書館だよりのタイトルロゴも書いてくれました。

第19回 図書館まつり

6/8



ガチャガチャコーナー



ミニ縁日



リサイクル広場



紙とんぼづくり



オープンカフェ

当日は天候に恵まれ、多くの方にご来館いただきました。ありがとうございました。各コーナーとも大盛況で、楽しい時間を過ごしていただけたことと思います。

次回の図書館まつりは、来年4月にオープン予定の生涯まちづくりセンター「あすみる」で開催することになります。今後とも皆さんに親しまれる図書館を目指していきたいと思っていますので、お気軽にお立ち寄りください。



播州織しおりづくり



プラバンづくり



大人気♪
はしご車&白バイ



フィルムカバー体験



3Dカードづくり



多可の歴史 紙芝居



おはなし会

特産品販売

全長1マイルにおよぶ円筒形の銀河調査船は極限の加速度で、ある恒星系へ急行しています。数時間後に爆発するその恒星の第三惑星には電波を利用できる程度の知性が存在しており、この破滅に瀕した種族を救うことが船長アルヴェロン率いる乗組員達に課せられた任務なのです。そして間もなく滅びの時を迎える悲運の惑星とは、銀河の片隅にある地球に他ならないのでした。アルヴェロンは宇宙の未知なる力によって全知を与えられた異星人なのです。船が到着した地球は膨張する太陽に焼かれ既に惨憺たる有様で、人類の痕跡はあるものの救助すべき人は発見できず、まさに太陽が大爆発を起こすぎりぎりのところで船は太陽系を離脱します。地球の若い文明を救えず自責の念を持つ彼らでしたが、やがて地球人たちが信じ難い行動を起こしていたことを知るに至ります。地球人たちはアルヴェロンらを畏れさせるほどの勇氣、行動力、冒険心をもつ種族だったとわかる驚愕の場面です。読者を楽しませ、その想像力を大きく広げてくれた作家アーサー・C・クラークの痛快すぎる人類賛歌です。(り)

『太陽系最後の日』



アーサー・C・クラーク/著
早川書房 (933 円)
ジャンル：小説

表紙の中央に描かれた女性：見覚えはありませんか？ そう、多可町ならではのふるさと納税「たかテレビニュースキャスターになれる券」にご寄附くださった、昨年10月からテレビに出演されている、松村二美さんです。奈良県で3年、その後は東京で、4人の子どもを育てながら定年まで教師を続けられた「教師が天職」の女性。信条は「学校や学級は楽しく愉快でなければならぬ」。それが、この本のタイトルにもなっています。人は「愛されたい」「認められたい」「役に立ちたい」「ほんのちよっぴり自由が欲しい」という4つの願望を持っているので、これらを大切に教育してきた、という松村さん。体当たりで挑まれた、教育現場での日々を綴った本書には、子どもたちとの微笑ましいエピソードが数多く掲載されています。そして「教育に悩んでいるどこかの誰かに、ほんの少しでもお役に立てれば」という思いが込められています。続編も4巻まで出ています。また松村さんは、今号の巻頭文にもご寄稿くださっています。ぜひ、そちらも読んでみてください。(あ)

『学級愉快』



松村二美/著
風詠社 (370 円)
ジャンル：実用書

東京の小学校から転校してきた編みこみビーズの三橋明来、6年生。転校初日の登校中、家の近くのマンションから同級生の倉木小夜子が出てきます。早速友だちになろうと話しかけた明来でしたが、いくら話しかけても返事も素っ気なく、握手もしてくれません。学校内でもほとんど誰とも話をしない小夜子にはだれにもみえない秘密の友だち「黒猫」がいたのです。そして、一見社交的に見える明来にもだれにも言えない秘密があつて……。この本は「心の中」が大きなテーマです。2人の秘密が明かされる時、明かされ方によってとらえ方や感じ方は違うものです。嬉しさや悲しさ、寂しさや怒りなど、誰もが感じたことのある感情の数々が見事に表現されています。とても引き込まれるテンポ感のよいストーリーで次々とトリズミカルに繰り広げられる展開が次のページを開きたくなります。何より一人ひとりの心の描写がとても繊細で色鮮やか！ 第2回フレーベル館ものがたり新人賞大賞を受賞した作品で、子どもも大人も読んで欲しい、そんな1冊です。(よ)

『あの子の秘密』



村上雅都/作
フレーベル館 (K913 円)
ジャンル：児童書